

氏名（本籍）	ロ ヨウ LU YAO（中華人民共和国）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第138号
学位授与年月日	2020年3月23日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第36条第2項及び広島市立大学学位規程第3条第2項の規定による
学位論文題目	漆を材料とする「平面表現」についての考察
論文審査委員	主査 教授 大塚 智嗣 委員 教授 南 昌伸 委員 教授 小椋 範彦 委員 准教授 前田 力 委員 准教授 城市 真理子 委員 教授 関村 誠

論文内容の要旨

本論文の主要なテーマである、この「平面表現」をなりたたせているのは、平らな表面、多様で自在な装飾技法、絵画のような意匠であると、筆者は考えている。

第一に、筆者が「平らな表面」を「平面表現」の中で最も基本的な要素として挙げる理由は、「平面表現」が際立つ漆工芸品は、平らな表面が作品の装飾上大きく重要な部分を占めているからである。伝統的な漆工芸の技法は飲食器や文房具、宗教用具、そして建築物の装飾に多用され、平らな平面との直接的な関係性はないように見える。しかし実際には、硯箱の表面をはじめ、玉虫厨子や小唐櫃の上面部分、高台寺霊屋内陣の壁など、いずれも平らな面である。本来、漆による装飾が施されている最も基礎的な部分となるのが平面部分であり、漆による「平面表現」というものは、もともと一般的な漆工芸品としても確認できる現象だと言えよう。

筆者が第二に挙げる漆による装飾技法は、そもそも「平らな表面」を基盤としている。平らな面を備えていれば、漆の独特な性質も自由自在に操ることができる。つまり、画材と同様、漆は様々な長さや太さの線が引けるようになり、色の濃さも巧みにコントロールでき、絵画と近い装飾の効果をもたらすことが可能になるということである。更に、漆の光沢感や厚みによる起伏感、そして金属や貝などの材料の併用による効果は、一般の絵画とは比べることの出来ないほど多彩でさえある。また、漆専用の道具で施された蒔絵や彫漆、変塗りなどの技法も、作品に視覚的、触覚的な質感を与え、表現力を大いに豊かにすることができる。これらはさらに漆工技法の多様化を後押しし、漆による「平面表現」の発展への貢献に繋がるのである。

第三に挙げる絵画のような意匠は、以上の二つ、即ち、平らな表面、多様で自在な

装飾技法という条件の上に成り立つ。筆者の考察している「平面表現」においては、これらをいかに組み合わせ、装飾的な美感を生み出すかは重要な事である。漆工芸品は観賞性を持つ実用器であるが、実用を前提とし、鑑賞はあくまで二次的な器物であるため、器物の外観的な特徴を考えてから、適切な装飾技法を行っている。

しかし、漆の、本来塗料としての美しさ、艶やかさは、大きな平面部分に塗られることで、単なる塗料という以上の装飾的表現へと展開した。様々な技法の発展により、風土や時代の好みに合った絵画的な表現へと近づいていったのは、当然のことと言えるだろう。

そこで本研究は、日本の漆文化の歴史を振り返り、各時代における漆の性質、特徴と伝統工芸との関係などを考察し、平面表現における漆の加飾、意匠及び意味を検討する。それによって、漆が塗料から絵画領域に展開した理由、及び伝統工芸と現代美術が漆を通じてどのような繋がりを持っているかを考察し、さらに、自分の制作によって平面表現の可能性を提示することを目的とする。

第一章は、漆の歴史を辿り、その採取、加工の変化を分析することによって、漆という材料の性質と特徴を探り出すことを目的とする。時代変遷に伴って、漆工芸は鑑賞される実用品として、消費者の要望に応じて、生産方法や加工技術、役割が変化し続け、多様な漆工技法と多彩な装飾効果が現れた。それは漆の特質を生かした平面表現の例を提示する。

第二章では、伝統漆工品を分析し、漆の材料特性から装飾技法を分類することにより、平面における技法と意匠の時代特徴を分析する。まず、第一章の内容に基づき、『日本美術全集』に収録されている伝統漆工品を参考しつつ、各種装飾技法に焦点を合わせ、その技法の特徴を分析する。次に、漆による装飾表現と絵画の関係を分析することによって、漆による平面表現に応用する必然性を証明する。

第三章では、漆芸分野において平面作品がどのように登場し、のちに定着をみたのかを柴田是真の平面作品の分析を通して考察する。伝統的な漆芸技法を基づいた柴田是真の「漆絵」と「蒔絵額面」という新たな表現形式は漆の「平面表現」にどのように発展したかを考察する。

第四章では、漆による「平面表現」の特徴を踏まえ、柴田是真の技法の復元を試み、自分の作品への応用に挑戦する。柴田是真によって、漆絵と青海波塗を調査し、技法分析、復元、気づき、技法の応用の四つの観点に分けて論じ、実際に復元過程での問題点があるかを提示することを目的とした。そして、材料の性質に関する知識や、加飾技法の活用に自分の作品への試みを合わせ、漆を材料とする「平面表現」と現代漆芸への影響と、漆を材料とする「平面表現」の今後の展開について論じる。結論では、漆による「平面表現」とは、器物の表面を加工する単なる装飾であることではなく、漆工芸を自立した芸術表現の領域へと導いた重要な要素であることを論証する。

論文審査の結果の要旨

路瑶の提出した論文「漆を材料とする「平面表現」についての考察」は、予備審査からタイトルを変更し、「平面表現」という観点をより強調して、本人の意見と引用の区別に留意しつつ修正したものである。予備審査と同様の4章の構成で、第一章「漆文化の展開」では、日本の漆芸が「漆文化」と称されるほど、多様な技法や表現と独自の歴史的発展をもち、特に工芸品の平面部分での装飾にしばしば絵画的な表現があることや、幕末・近代には柴田是真によって漆の絵画が登場したことを述べ、漆工芸の「平面表現」に着目した動機を呈示した。第二章「伝統漆芸の平面における技法と表現」では、漆絵・蒔絵・螺鈿の技法とその平面部分での表現について、江戸時代以前の具体例を示した。第三章「漆の新たな平面表現の展開—柴田是真の作品を中心に」では、漆の技法と併せ四条派の絵画技法を会得した柴田是真による漆の絵画作品について検討した。是真の「漆絵画帖」と「蒔絵額面」にみられる多様な技法と絵画表現、および欧米向けの輸出工芸の振興との関わりについて述べている。第四章「平面表現」の追求—柴田是真の作品にもとづいて」では、是真の漆絵技法の復元を試み、模写制作の他、是真の開発した技法を用いた路瑶自身の作品制作を紹介した。

予備審査以降の修正により、論旨の展開はより明快となった。ただし、注と引用および日本語には、さらに修正が必要である。それらの改善は公開までに可能と見込んで合格とした。